

行方不明の正体

はじめに引退馬問題の定義

未来へ

長い余生と、多額の費用

ギャンブル、興行として

JRAの引退馬支援 引退後の選択肢

知る、考える、つなげる

引退馬支援の実例

10分でわかる

引退馬問題の

“いま” 現在

引退競走馬の進路

引退後に

統計にはない “その後”

一変する経済性

は 私たちCreem Panとは

命と経済

競馬が生む光
社会を支える競馬



目次

P4-5 | はじめに ・私たちCreem Panとは

P6-7 | 引退馬問題の定義 ・引退馬問題とは ・アンケート

P8-9 | 競馬が生む光 ・ギャンブル、興行として ・社会を支える競馬

P10-11 | 引退後の選択肢 ・引退競走馬の進路

P12-13 | 行方不明の正体 ・統計にはない“その後”

P14-15 | 命と経済 ・引退後に一変する経済性 ・長い余生と、多額の費用

P16-17 | それでも生かすために ・JRAの引退馬支援 ・引退馬支援の実例

P18-19 | 未来へ ・知る、考える、つなげる

まずは知ることから。



私たちCreem Panとは

私たち Creem Pan は、「馬を究めて、つくるを極める。」をミッションに掲げ、競馬の大型広告案件から引退馬問題に関するコンテンツまでを手がけるクリエイティブプロダクションです。

また、「“つくる”を通じて引退馬問題の前進を本気で目指す」というビジョンのもと、競馬促進の仕事で得た収益を、啓発・発信を中心とした独自の引退馬支援活動へと還元してきました。

Creem Pan 代表の平林は、幼少の頃から大の競馬ファンで、10代の頃に引退馬問題を知り、いつかこの問題と向き合うと心に決めます。後に地上波テレビのディレクターになった平林がドキュメンタリー映画『今日もどこかで馬は生まれる』の制作チームとして Creem Pan を発足。同作は完成後、劇場公開や配信、海外での放映へと広がり

を見せます。この問題は一度きりの作品で終わらせるのではなく、社会の中で継続的に向き合い続けなければならない。そう考えるようになったことが、Creem Pan を法人化するきっかけでした。

その後も私たちは、『Loveuma.』の運営、代表・平林による書籍『サラブレッドはどこへ行くのか - 引退馬問題から見る日本競馬 -』の上梓、そして2026年ホースメッセでのパネル展示『5分で分かる引退馬問題の“今”』など、さまざまな表現手段を通じてこの問題に関わり続けてきました。パネル展示には1,000人を超える方が訪れ、寄せ書きスペースも多くの言葉で埋まりました。「今日来られなかった人にも見せたかった」という声や、パネルを撮影して持ち帰る姿に数多く触れたことで、この内容には会場限りで終わらせず、形として遺す意義があると感じました。



この冊子は、
代表の平林が引退馬問題に対して
約10年にわたりジャーナリズムの視点から
向き合ってきた中で、
この問題の複雑さと困難さを、
できるだけ端的に整理したものです。

もちろん、これを知るだけで
馬が救えるわけでも、
問題が解決するわけでもありません。
けれど、まずは知ることから――。

その思いを込めて、この冊子をお届けします。



1987 Creem Pan 代表の平林健一が誕生する。 | A



1991 平林が競馬を見始める。愛読書は競馬新聞・イトと種牡馬辞典。



2004 平林が引退馬問題を知る。いつかこの問題に正面から向き合うことを決意。



2017 平林がサークル・Creem Panを発足し、引退馬問題を題材にした映画制作を開始。 | B



2019 映画『今日もどこかで馬は生まれる』完成し、全国の独立系劇場で公開。 | C



2020 映画『今日もどこかで馬は生まれる』が門真国際映画祭2020 優秀作品賞・大阪府知事賞受賞。 | D



映画『今日もどこかで馬は生まれる』が国内のプラットフォームで配信開始。北米と韓国で放映。

2021 映画サークル・Creem Panを株式会社として登記。

2022 人と馬をより身近にするサイト『Loveuma.』を開発・運営を開始。

2024 平林がNHK出版より『サラブレッドはどこへ行くのか - 引退馬問題から見る日本競馬 -』を上梓。 | E

JRA様の70周年記念映像『ICHIRO MEETS KEIBA Special Movie』の制作を担当。

2025 昨年に続きJRA様の『ICHIRO MEETS KEIBA Special Movie 2025』の制作を担当。 | F

JRAシステムサービス様の引退馬特集シリーズ『セカンドキャリアウマ』の制作を担当。 | G

2026 ホースメッセ2026にて、パネル展示『5分で分かる引退馬問題の“今”』を企画・実施。

1 引退馬問題の定義。

引退馬問題とは 引退した競走馬の多くが、
天寿を全うする前にその生涯を終えている――。

私たちは、**家畜として生まれた馬が競馬というエンターテインメントを通じてそれを越えた存在となり、その後ふたたび家畜として処理されていく構造に対して、競馬ファンを中心とした人々が抱く違和感を「引退馬問題」と定義**しています。

この問題は、単なるアニマルウェルフェアの観点だけで結論づけられるものではありません。競馬がなくなれば、ファンの楽しみが失われるだけでなく、社会のさまざまな領域に影響が及ぶでしょう。

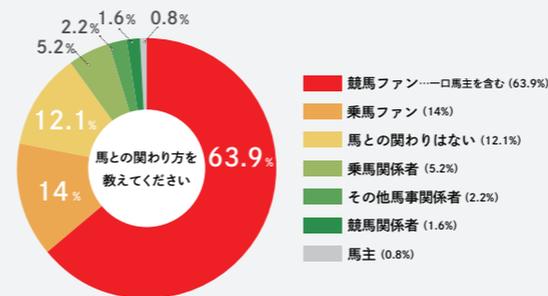
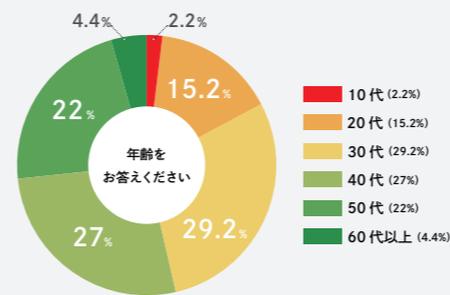
弊社が開発・運営する、人と馬を身近にするサイト『Loveuma.』では、2022年10月から90

日間、サイト訪問者を対象に「**引退馬問題とは一体どういうものなのか**」を尋ねるアンケートを実施し、人々の声に耳を傾けました。このアンケートでは、右のように、「問題か」「何が問題なのか」という問いだけでも多様な論点があることが浮き彫りになったと言えるでしょう。

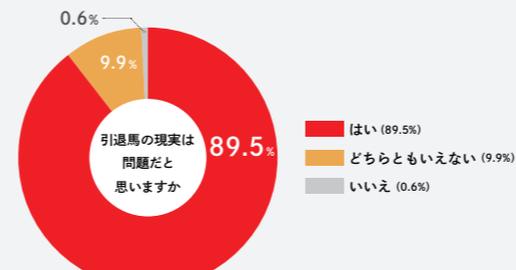
アンケート調査後も Loveuma. は、この極めて複雑な問題に対し、独自の取り組みで取材や調査を重ねてきました。

この冊子では、引退馬問題の“今”をわかりやすく整理し、見た人それぞれが「**自分なら何ができるか**」を考えはじめるきっかけをつくります。

クイズ①日本競馬の馬券の売上は世界で何位？



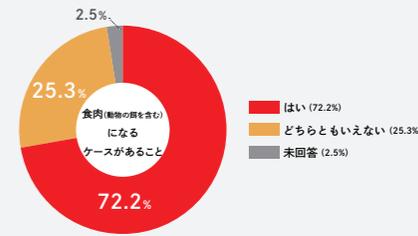
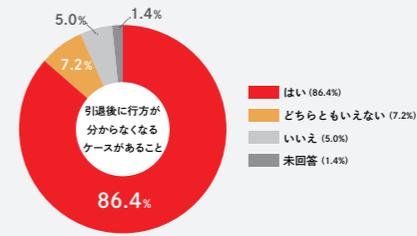
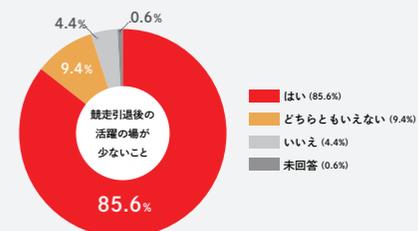
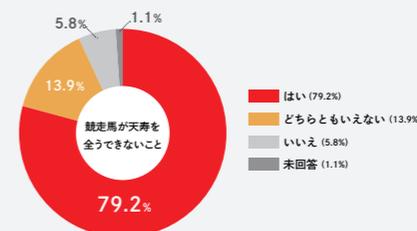
回答者属性



引退馬の現実の問題だと思うか？

アンケートの概要

実施期間:2022年10月18日～2022年12月1日 回答数:363件
調査方法:Loveuma.上で行った選択式・自由記述式Webアンケート



引退馬の現実のどこに問題があると思うか？

A. クイズ①の答え
「第一位」



競馬が生む光。

ギャンブル、興行として

海外から見ても日本の競馬は「**世界一**」と評されることがよくあります。その理由は「馬券の売り上げ」そして「**熱狂するファン**」の存在です。

日本の2025年の中央競馬の売上は約3兆5000億円、さらにこれに地方自治体が主催する地方競馬の売上約1兆1500億円が加わる。合算すれば、ゆうに**4兆6500億円**にもなります。日本は最も馬

券が売れている国として知られています。

JRAの入場者数は2025年度で約**523万人**でした。G1レースともなれば、競馬場の盛り上がりは尋常ではありません。日本競馬で騎乗する外国人騎手達が口々に「日本の競馬ファンは世界一だ」というのもこれが所以でしょう。



1954年から2025年までの中央競馬の売得金額・入場人員推移

(JRAホームページをもとに作成)



1954年から2025年までの中央競馬の売得金額・入場人員推移

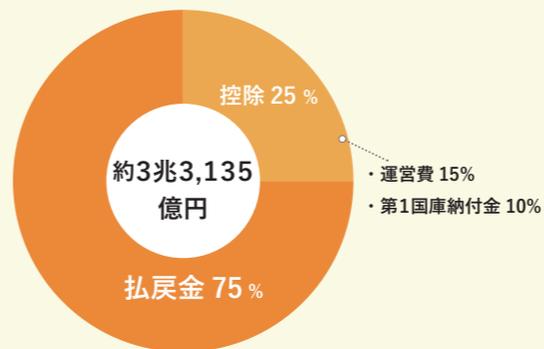
(JRAホームページをもとに作成)

社会を支える競馬

そして何より、主催者であるJRA職員や地方競馬の職員、騎手、調教師など運営の中核に携わる人だけでなく、生産・育成牧場の関係者や、それらを管理する組合法人など、**競馬産業のもとで生計を立てている人**が数え切れないほどいることも、競馬が社会に与える功績と言えます。

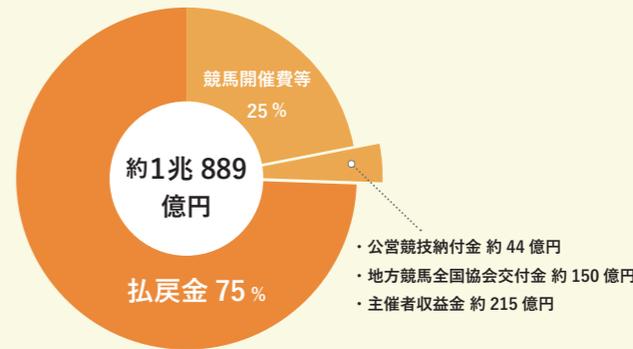
そして競馬で動くお金は、働く人の仕事や地域の経済、**国に納めるお金**にもつながっていることも見逃せません。JRAは、馬券の売上の一部と、事業で得た利益の一部を国庫納付金

として国に納めています。2024年度には約**3,665億円**が国に納付され、畜産振興や社会福祉に役立てられています。各自治体が主催している地方競馬も2023年度には約**215億円**が地域の教育・文化の発展や社会福祉の増進、医療の普及やスポーツ振興、公共施設の整備などに利用されました。競馬が安定的に興行を継続し、これほどまでに巨大産業化できたのは、こうした国や自治体への貢献が大きいからだと言えるでしょう。



中央競馬売得金の使途(2024年度)

(JRAホームページをもとに作成)



地方競馬売得金の使途(2023年度)

(地方競馬情報サイト「KEIBA.GO.JP」をもとに作成)

クイズ②2025年に引退した馬は中央・地方競馬をあわせて何頭以上?

クイズ③の答え
A. 「1万頭以上」



3 引退後の選択肢。

競馬が私たちへ与えるポジティブな影響を“光”と呼ぶならば、そこから生まれる“影”こそが、**引退した競走馬の現実**に他なりません。2025年のデータによると、中央・地方競馬合わせて、**1万頭以上の馬が引退**（競走馬登録抹消）しています。その進路は以下の通りです。



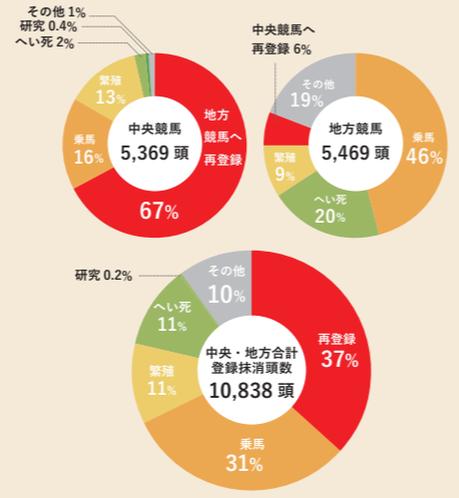
競走馬登録とその後の進路

（農林水産省畜産局競馬監督課「馬産地をめぐる情勢(令和7年7月)」をもとに作成）

単位：頭

	2023年末 在籍登録馬数	2024年 登録抹消数	再登録 乗馬	繁殖	研究	へい死	その他
中央競馬	9,185	5,369	3,616	858	699	19	112
地方競馬	12,522	5,469	355	2,489	505	-	1,076
計	21,707	10,838	3,971	3,347	1,204	19	1,188

※中央：JRA調べ 地方：NAR調べ



競走馬の登録抹消事由別頭数

（農林水産省畜産局競馬監督課「馬産地をめぐる情勢(令和7年7月)」をもとに作成）

引退競走馬の進路

一方で、この統計には「**落とし穴**」があることにも触れなければなりません。左の図が示しているのは、あくまで引退後に到達した“セカンドキャリア”までの進路であり、**その先の推移を追跡した統計は存在しません。**

すなわち、競走を引退して乗馬クラブで第二の役割をスタートさせたとしても、クラブの馬房には限りがある以上、何らかの事情で退厩を余儀なくされ、「**乗馬の引退馬**」が生まれる可能性は十分にあります。しかし、そのような変化は統計に

は表れないのです。さらに言えば、乗馬クラブの在籍が数週間・数カ月で終わった馬も、10年穏やかに過ごした馬も、統計上はいずれも同じ「乗馬」として扱われます。実はこの点こそが、**引退馬問題を複雑にしている**要因の一つだと言えるでしょう。そしてその末に生まれているのが、「**引退馬の行方不明**」なのです。

職業名	割合	職業解説
繁殖牝馬	中	牧場で“母馬”として仔馬を産み育てる道。(牝馬限定)
種牡馬	低	牧場で種付けを行い次の世代を残す道。(牡馬限定)
リードホース	低	生産牧場で仔馬のそばに付き、群れの手本になったり落ち着かせたりする役割。
乗馬	高	乗馬クラブ等で人を背に乗せる仕事。趣味用と競技用とそれぞれがある。
その他競技馬	低	ホースボール、エンデュランス等、乗馬スポーツの競技馬として働く道。

職業名	割合	職業解説
ホースセラピー / 教育	低	体験乗馬・引き馬・ふれあい等を通して、人のケアや学びの場を支える役割。
誘導馬 / 騎馬隊 / 祭礼馬 / 神馬	低	競馬・式典・行進・警備・祭礼行事・奉納行事など公共の場で役割を担う道。
養老馬	低	働く役割は持たず、支援や牧場の体制の中で静かに暮らす道。
研究馬	低	獣医学の発展などのため研究施設で飼養される道(研究用途として扱われる)。
食肉	高	と畜後食肉として加工されて、人や動物の食べ物になる道。



4 行方不明の正体。

乗馬や繁殖などの仕事に進んだ馬たちもいます。

しかし、そのすべての馬が最期までその役割を全うできるとは限りません。

では、役割を終えた馬たちは、その後どうなるのか。

その答えは、「**食肉になることが多い**」と言えるでしょう。

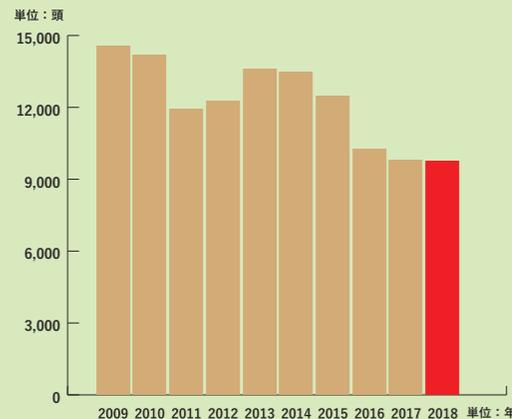
このような進路をたどる馬は、統計上では捉えられず、業界では「**行方不明**」と呼ばれています。

統計にはない“その後”

では、食肉となる馬は実際にどれくらいいるのでしょうか。

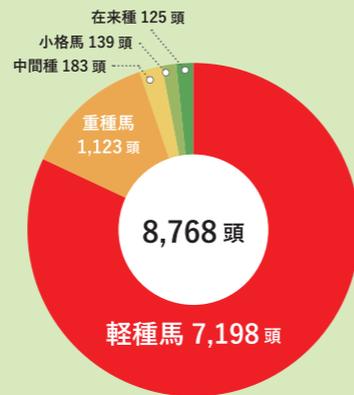
引退馬に限ったと畜数を直接示す統計はありません。

そのため、ここからは複数の公的データをもとに、**独自に推計した「仮説」**を提示します。



国内のと畜馬数の推移

(日本馬事協会「馬関係資料(2022年)」をもとに作成)



国内の生産馬数と品種の内訳(2018年)

(日本馬事協会「馬関係資料(2022年)」をもとに作成)

左下の2つの図の、左は国内のと畜馬数、右は国内の生産馬数と品種の内訳を示したものです。これら2つの資料で同一世代を比較できるデータは、現時点では2018年のものが最新のため、ここではその数字で紹介します。

2018年のと畜馬数は9,761頭で、そのうち輸入馬は4,678頭でした。

$$\begin{matrix} \text{と畜された} & \text{と畜された} & \text{と畜された} \\ \text{馬} & \text{輸入馬} & \text{国産馬} \\ 9,761 - 4,678 = 5,083 \end{matrix}$$

この計算によって、この年に**と畜された国産馬は5,083頭**だったということがわかります。

一方で、同じ2018年の**国産生産馬は8,768頭**でした。そのうち、競馬で使用される軽種馬(サラブレッド7,192頭、アングロアラブ65頭)は、全体の**約82%**です。

$$\begin{matrix} \text{と畜された} & \text{生産された} & \text{と畜された} \\ \text{国産馬} & \text{軽種馬} & \text{引退馬} \quad \text{※仮定} \\ 5,083 \times 82\% = 4,168 \end{matrix}$$

この計算で推察すると、2018年にと畜された国産馬5,083頭の82%は4,168頭となり、仮定ながら**一定数の引退馬がと畜されている**と考えることができます。

なお「食肉」とは、人が食べるものに限らず、ドッグフードの原材料や、動物園・水族館の餌になることも多いです。

前述の通り、サラブレッドの生産頭数は**毎年7,000頭以上**を数えます。

そのすべてを生かし続けることは、馬を飼養できる人材や場所の確保、財源、食肉産業で生計を立てている人の存在など、あらゆる要素を鑑みても、**極めて困難**だと言わざるを得ません。

そしてその結果として生まれているのが、「**行方不明**」すなわち「**食肉**」という現実なのです。

もっと知りたい方はこちら ▶

競走馬登録抹消後の馬たちを買い付ける
家畜商・Xさんを取材し、あまり表に出ることなかった実情を
匿名という条件のもとで紹介し、大きな反響を呼んだ記事

Loveuma.
<https://www.loveuma.jp/>

「生かすことが幸せなのか」家畜商・X



A. クイズ④の答え
「25～30歳(業界平均)」



5 命と経済。

引退馬はなぜ、生かし続けることができないのでしょうか。

この問いの答えを考えるうえで避けて通れないのは、引退馬の「**経済性**」に他なりません。

引退後に一変する経済性

競馬は、圧倒的に高い経済性を確立しています。競馬ファンのみならず、「お祭り」として楽しみにしている人も多い有馬記念の1着賞金は5億円です。

そんなビッグレースを制することを夢見る馬主は、将来性のある仔馬に巨額の投資をします。

日本最大規模の馬市である「セレクトセール」では、2025年の落札頭数が453頭、売却総額が約327億円、1頭の平均価格は**約7,200万円**でした。

しかし、引退馬でも競馬産業の外に出ると、状況は一変します。

乗馬用にトレーニングされていないサラブレッドの平均取引額は、時期や物価により変動するものの、食肉用途の取引価格を基準として、**約30～50万円**になるとのこと。

これは、セレクトセールの平均取引額の実に100分の1です。

もしその後、乗馬競技で一流になったとします。しかし例えば、障害馬術日本一を決定する「全日本障害馬術大会(大障害)」で1位の賞金は400万円で、有馬記念の1着賞金5億円と比べると、実に**約125分の1(約0.8%)**です。

競馬では、獲得賞金が馬主を中心に、騎手・調教師・厩務員などへ規定の割合で分配される一方で、乗馬競技には同様の分配ルールがないため単純な比較はできませんが、両者の経済規模の差は明らかです。

有馬記念

1着	5億円
2着	2億円
3着	1億3000万円
4着	7500万円
5着	5000万円



有馬記念と全日本障害馬術大会の賞金比較(2025年)

全日本(大障害)障害馬術大会

1位	400万円
2位	100万円
3位	50万円
4位	8万円
5位	3万円



長い余生と、多額の費用

そももちろん、引退馬が生きていくためのランニングコストもかかります。

馬の平均寿命は、業界では**25～30歳**といわれていますので、例えば6歳で引退した馬が30歳まで養老牧場で過ごすとなると、24年間で**約3,500万円**の費用がかかります。さらに、ここに削蹄費(爪の手入れ代)、医療費などが別途生じます。

人間の場合は社会保障が充実していますが、日本の引退馬

の場合、一部の優秀な成績を収めた馬以外に**余生を保障する制度は存在せず**、これだけ多額の費用を誰かが補わなければ、引退馬は生きられません。

競走引退後に繁殖馬になろうが、乗馬になろうが、その他どんなキャリアに進んだとしても、必ず**第二・第三の引退**が訪れます。そして、それが馬生のターニングポイントとなることは言うまでもありません。

クイズ⑤ JRAの引退馬支援の年間予算はおよそいくら?

A. クイズ⑤の答え
「約19億円」



6
それでも
生かすために。

中央競馬を主催するJRA(日本中央競馬会)も、近年は積極的に引退馬支援を行っています。

2017年12月には「引退競走馬に関する検討委員会(以下:検討委員会)」を発足させました。

JRAの引退馬支援

検討委員会は、引退馬だけが出場できる馬術大会・RRC杯の開催をはじめ、ホースセラピーの普及に向けた啓発・促進活動、引退馬が次のキャリアへ進むために必要なリトレーニングの促進など、**引退馬の居場所づくり**につながる施策を講じています。

さらに2024年4月には、JRAの出資によって一般財団法人「Thoroughbred Aftercare and Welfare(以下:TAW)」が設立されました。

JRAおよび検討委員会が引退馬支援の方向性を示す「**ハンドル**」だとすれば、TAWは決められた方針を実際の取り組みとして形にしてい**く「エンジン**」といえる組織です。

こうした“両輪”のもと、JRA主導の引退馬支援は「引退馬の利活用」を柱に展開されています。

その活動内容を示しているのが、右の表です。

この表を見る限り、JRAは引退馬支援に関わる取り組みに対して、**年間で約19億円を抛出**していることとなります。3兆円を超える収入と支出があるなかで、この予算額を多いと見るか少ないと見るか。その受け止め方は、人それぞれでしょう。JRAが事業の至上命題としているのは、あくまでも**競馬の振興であり、引退馬の保護活動ではありません**。これは、これまでもこれからも変わらない前提です。

一方で、JRAが日本国内において、引退馬支援に**最も大きく資金を投じている組織**であること、そして年々、**着実に成果を挙げている**こともまた事実です。

		単位(円)
項目	事業内容	2025年度予算
施策の検討と情報の収集・発信	引退競走馬に関する検討委員会の開催、国際フォーラム参加、諸調査等の実施	5,000万
	馬の多様な利活用に関する情報を発信するための競馬場でのイベントや、獣医師学会でのシンポジウム等の開催	2,500万
	馬事公苑における高齢者乗馬・ホースセラピー活動の実施及び普及	6,000万
セカンドキャリア促進への支援	引退競走馬のセカンドキャリア促進のための一時受入施設の運営等の実施	8,000万
	馬を安全に取り扱う人材を養成するための講習会の開催	4,000万
	乗馬等への転用のためのリトレーニング技術講習会の開催、引退競走馬を対象とした競技会での賞金提供	6,300万
	ホースセラピーの活動者向けガイドライン等の作成・配布、技術や考え方に関する講習会の開催	1,500万
サードキャリア(養老・余生)への支援	被災地等での乗馬・引馬体験、馬の展示等の実施	5,000万
	乗馬施設や教育機関、自治体等が行うホースセラピーや教育、地域活性化等への利活用のモデル的な取組のための繋養費用や施設の補改修等に係る費用の助成	11億
	養老馬の繋養を行う牧場や引退競走馬の受入先の調整等を行う団体への奨励金の交付	3億1,000万
	引退した重賞勝馬の繋養展示を行う施設への繋養費用の助成	6,600万
		合計:18億5,900万

JRAの馬の利活用の取り組み状況

(農林水産省ホームページ「馬産地をめぐる情勢(令和7年7月)」をもとに作成)

引退馬支援の実例

もちろん、競馬主催者以外にも引退馬支援に関わる取り組みに熱心な組織はあります。

Loveuma.が選ぶ、引退馬を“生かす”4つの実例を紹介します。



認定NPO法人 引退馬協会

寄付やドネーションを主な財源として、引退馬の養老・保護や受け入れ先の確保に関わる活動を実施。継続寄付や都度寄付に加え、里親制度を通じて、馬を継続的に支える仕組みも用意しています。



株式会社TCC Japan

メタセコイアと馬の森、Bafun Yasai TCC CAFE、TCC Therapy Parkなどの拠点をもち、来訪や体験を入口に引退馬との接点を創出。施設運営とあわせて、TCCファンクラブと題した里親制度も用意しています。



Versailles Resort Farm

Yogibo ヴェルサイユリゾートファーム

牧場内に宿泊・飲食などの機能を備え、見学・滞在体験と組み合わせた運営を実施。さらにグッズ販売やイベント開催、レンタカー事業など、従来の養老牧場の枠にとどまらず、預託料以外の収益源を複数化しつつ、里親制度も用意しています。

HORSE TRUST

NPO法人 ホース・トラスト

特定非営利活動法人ホーストラスト

引退馬の受け入れと終生飼養を中心に、養老の場を提供。1年を通して24時間昼夜問わずに放牧を行うスタイルを基本とするなど、独自の仕組みで、預託料を抑えながら受け入れを成立させている点が特徴です。里親制度も用意しています。

7 未来へ。

引退馬問題は、すぐに「唯一の正解」にたどり着けるテーマではありません。けれど、出典のある情報を知り、一人ひとりが意見を持ち、発信していくことによって、議論は深まり、支援のかたちも少しずつ変わっていくはず。私たちは、まずその土台をつくるのが大切だと考えています。

知る、考える、つなげる

冒頭でも触れた通り、私たちCreem Panは、競馬の振興に関わる仕事によって収益を得ています。そして、その収益をもとに、啓発や発信を中心とした独自の引退馬支援に取り組んできました。これはあくまで私たちの考えですが、引退馬問題に向き合い、その支援のあり方を考えるべきなのは、競馬から何らかの恩恵を受けている人や企業でもあるはず。です。

実際、引退馬支援に関わりたいと思っている人や企業は、決して少なくないと感じています。ただ、その一方で、「何をすればいいのか」「どのような関わり方が適切なのか」が分からないまま、行動に結びつかずに終わってしまうことも多いのではないのでしょうか。

そして、それは私たち自身にとっても同じです。引退馬問題を知ってもらい、考えてもらうところまでは取り組めていても、その先にある“支援としての具体的なアクション”を、どのように設計し、実行していくべきかについては、いまなお手探りの状態にあります。

Creem Panは、“つくる”を通じて引退馬問題の前進を本気で目指す「会社」です。映画をつくること。書籍を書くこと。サイトを運営すること。展示をつくること。そうした表現の力を通じて、問題を知る人を増やし、考える人を増やす。そしてこれからは行動する人や企業をつなげていく。そんな場を、少しずつつくっていききたいと考えています。

この冊子が、その小さな入口になれば幸いです。

より深く、知る

観る

ドキュメンタリー映画

今日もどこかで馬は生まれる



門真国際映画祭 2020
優秀作品賞・大阪府知事賞 受賞

読む

サラブレッドはどこへ行くのか

「引退馬」から見る日本競馬



知る

Loveuma.
<https://www.loveuma.jp/>



次へ、つながる

引退馬問題について、情報交換や対話の場に
関心のある企業・個人の方は、
以下の連絡先からお声がけください。

今後、Creem Panでは、
同じ思いを持つ方々とつながる機会も
少しずつつくっていききたいと考えています。



Tel | 03-6821-1932
mail | info@creempan.jp
担当者: 平林



馬を究めて、
つくるを極める。



私たちは“つくる”を通じて
引退馬問題の前進を
本気で目指す会社です。